【自著紹介】小島基洋、山﨑眞紀子、髙橋龍夫、横道誠編

『我々の星のハルキ・ムラカミ文学——惑星的思考と日本的思考』

（彩流社　2020 年 10 月）

ムラカミの小説は今や米国発の「地球」文学ではなく、日本発の「惑星」文学としてある——G・C・スピヴァクならそう言ったかもしれない。日本語で書かれ、日本を舞台とする村上の作品は、英語や米国文壇を経由することなく、ダイレクトに各言語に翻訳され、この「惑星」の隅々まで流布していく。

では、なぜ村上春樹だけが、ハルキ・ムラカミとして、こうも容易く言語と文化の壁を越えていくのか——このような問いを「惑星」の住人たる我々は発さざるを得ない。その未知なる答えを探求するのが本論集の目的である。論点は以下の四点「翻訳」、「歴史／物語（hi/story）」、「海外作家」「紀行」に整理される。

【翻訳】

村上がムラカミとなるためには外国語訳を必要とする。各翻訳者の苦闘の痕跡を精査することは、作品がいかに越境していくかを知るためには不可欠な作業だろう。

・１章　「ヨーロッパに浮かぶ二つの月——村上春樹『１Ｑ８４』を翻訳すること」　アンナ・ジェリンスカ＝エリオット、メッテ・ホルム

・2 章　「村上春樹『国境の南、太陽の西』の新旧ドイツ語訳」　横道誠

・3 章　「一九八五年の「相棒」とは誰だったのか——短編『パン屋再襲撃』の翻訳をめぐって」小島基洋

ジェリンスカ、ホルム両氏は『１Q84』の訳出過程を具体的に提示しながら、翻訳者たちの緊密なネットワークを描き出した（1 章）。横道氏は『国境の南、太陽の西』の新旧ドイツ語版を比較し、新たに日本語から訳された新版の秀逸さを論じる（2 章）。小島は短編「パン屋再襲撃」の「相棒」の性別が、ヨーロッパ諸言語の代名詞によって男性に固定されることを問題視した（3 章）。

【歴史／物語　（hi/story）】

なぜ「日本」を描く村上が「惑星」全体でムラカミとして受け入れられるのか。彼の作品が内

包する両極――特殊性と普遍性――について考察する。
・４章　「『海辺のカフカ』における時空―少年 A をめぐる方法としての歴史性」　髙橋龍夫
・５章　「村上春樹作品にみる『神話的思考』と物語の構造」　内田康
髙橋氏は『海辺のカフカ』のローカルな「歴史」性について考察し、神戸連続児童殺傷事件の少年 A がカフカ少年のモデルであることを明らかにする（４章）。内田氏は「物語」論的観点から「喪失」と「父殺し」の二つのコードに着目し、村上作品の「他者」や「分身」が年代によっていかに変化していったかを跡付けた（５章）。

【海外作家】
村上がムラカミとなるには、自らも閉じた日本文学の世界から抜け出すことが必要であった。彼が黄金期のアメリカ文学者二人と切り結んだ関係性が具体的に明かされる。
・６章　「『羊をめぐる冒険』をめぐるゴールド・ラッシュの点と線――初期三部作に刻まれたジャック・ロンドンの痕跡」　星野智之
・７章　「『ここは僕のための場所でもない』フィッツジェラルドからチャンドラー、そして村上へ」　ジョナサン・ディル
星野氏は鼠を探しに仁宇布地区に向かう『羊をめぐる冒険』の主人公に、一攫千金を夢見てクロンダイクに向かったジャック・ロンドンの痕跡を読み解く（6 章）。ディル氏は『風の歌を聴け』にフィッツジェラルドからの引用が多くあることを指摘し、フィッツジェラルドとその影響下にあるチャンドラーが若き村上に与えた多大な影響を論じる（7 章）。

【紀行】
村上がムラカミとなるのは彼の作品を通してだけではない。彼自身も国内外を物理的に移動しながら「惑星」を絶えず巡っている。
・８章　「村上春樹の紀行文と小説における相互影響について――なぜ『多崎つくる』は名古屋にもフィンランドにも『行かずに』書かれたか」」　林真
・９章　「『ノルウェイの森』誕生の地ローマ・トリコリレジデンス探訪記――村上春樹『遠い太鼓』から探るローマで誕生した意味」　山﨑眞紀子
・１０章「『海辺のカフカ』を歩く――舞台としての香川・高松」　髙橋龍夫
林氏は名古屋を舞台とした『多崎つくる』を例にあげ、村上の紀行文と小説の複雑な関係性に理論的枠組みを与えた（８章）。山﨑氏は村上が『ノルウェイの森』を執筆した「トレコリ」を訪れ、「死」をテーマとする本作が古代都市ローマで執筆された意味を探る（９章）。髙橋氏は香川県・高松市を渉猟し、『海辺のカフカ』の舞台を詳細に記述した（10 章）。

また本書の巻末には村上の伝記研究の第一人者たる平野芳信氏による「年譜」を収録している。

【小島基洋（英文学）】